Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-28

「山月記」の位置 ：＜この私＞が生きるとは

中森，康之

(Citation)
國文論叢,19:39-51

(Issue Date)
1992-03

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/81011778

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/81011778

「山月記」の位置

――〈この私〉が生きるとは――

中森康之

はじめに

人は誰でも自分が生きている社会の中で、時代の影響を何かしら受けている。例えば、思考や美意識、感受性といったものも、その例外ではない。しかしそれにもかかわらず、それをどこまで認めていったとしても、人は自分の中に、他の誰でもない、〈この私〉が考えたとか、〈この私〉が感じたということをいくら疑っても疑いきれない最後の一点を持っている。つまり、〈この私〉が、とどうしても言わざるをえない最後の一点を絶対に否定できないのである。もちろんその一点を強く握りしめるか、すぐに手放してしまうかは、個々人の自由である。しかし私の考えでは、中島敦という〈作家〉は、それを強く握りしめていた〈作家〉であり、彼の小説は、〈この私〉という視線に支えられている。

ところがこれまで、なぜかこのことに注意がほとんど払われなかった。例えば、「山月記」[1]で、虎に変身した原因を李徴が語る、次の部分を見てみよう。

> どうしても夢でないと悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして俱れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く俱れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。

従来この部分は、前半に重点を置いて、「人間存在への深い懐疑」[2]と読まれるか、あるいは後半に重点を置いて、「運命論」[3]と読まれるかのどちらかであった。[4]しかし、この部分の前半と後半にはある意味で矛盾（転調）があることについては、ほとんど触れられていない。後で詳しく見るが、この矛盾は「山月記」を読む上で非常に重要な点である。それは〈この私〉という視点を導入することによって、はじめて明らかになるだろう。

そこで本論では、〈この私〉という視点から、『過去帳』を手がかりにして「山月記」を見てみたい。

一

中学に入つてから目立つて身体の弱くなつた彼は、就寝後、眼をとぢては、「死といふもの」を——抽象的な死の概念ではなく、病弱な自分に遠からず訪れてくるに違ひない、（本当に其の頃彼は寿命の短いに違ひないことを確信してゐた）直接的な死を考へた。（「狼疾記」）

中島敦にとって重要だったのは、まず死の問題であった。[5]それは、死とは何かと言ったような一般的な問題ではなく、この文章からもわかるように、〈この私〉という視線から考えられた死であった。〈他人ではないこの私が、いつとも知れず（遠からず）、必ず死ぬ〉、つまり私の死は絶対に避ける事が出来ないし、それを誰とも交換出来ない。敦がここで書いている「死といふもの」は、「観念」的なものではなく、まさに〈この私〉の死の絶対性に直面した、「直接的な」死の問題であった。

もちろん『過去帳』に書かれている死が、観念的であることは否定できないが、『過去帳』から強く感じられるのは、むしろ他から見ると観念的に見える問題でも、〈この私〉にとっては、切実でありうるという視線なのである。だから、粟津則雄氏の言うように、この頃の敦の文章は、「ひどく観念的でありながら奇妙に肉感的でもある」（『文体の発見』昭和五八年　青土社）のだ。

では「直接的な死」は、〈この私〉にとって、どのように現れてくるのか。

彼はもう、とつくにあきらめて了つて居る筈でした。もう決して、医療なんかしまいと決心をした筈でした。だのに、そんな決心にも拘はらず、時として彼は、なほカルシュームの吸入に縋らうとするのでした。

ラッセルの音を聞く度に彼は思ひます。

——何故早く死んで了はないんだ。

だが夜、窓のカーテンを引いて、街の明るい灯を眺める時には彼は思ひます。

——いやだ。どうしても死ぬのはいやだ。（『ある生活』）

ここで述べられているのは、自分は必ず死ぬと一般的に理解することが、〈この私〉にとっては、何の意味もないという事態である。死という絶対的なものから、自分は決して逃れられないことは分かっているにもかかわらず、〈この私〉は生きたいと願っている。

したがって敦は、その意味を問うことを問題とした。つまり、死という絶対的な、〈この私〉の生の意味喪失という場面の中で、〈この私〉が生きることの意味を問うたのである。

ところが、そのような敦に待っていたのは絶望であった。なぜなら、いくら考えても〈この私〉が生きることの根拠は、〈この私〉の中には全くないことが分かったからだ。それを敦は、「存在の不確かさ」と呼んだのである。

二

三造の考へは再び「存在の不確かさ」に戻つて行く。

彼が最初に斯ういふ不安を感じ出したのは、まだ中学生の時分だつた。丁度、字といふものは、ヘンだと思ひ始めると、——その字を一部分一部分に分解しながら、一体此の字はこれで正しいのかと考へ出すと、次第にそれが怪しくなつて来て、段々と、其の必然性が失はれて行くと感じられるやうに、彼の周囲のものは気を付けて見れば見る程、不確かな存在に思はれてならなかつた。それが今ある如くあらねばならぬ理由が何処にあるか？もつと遙かに違つたものであつてい、筈だ。（「狼疾記」）

「存在の不確かさ」とは、自分や自分の周りの物が、今あるようにあらねばならぬ必然性がどこにもないことを指していると、従来考えられてきた。それ自体間違いではないが、敦がこの言葉で言い当てようとしたものを考えると、そのような言い方では不十分である。どこにも必然性がないのが問題なのではなく、〈この私〉の中にないことが問題であることをここで強調しておきたい。

会体の知れない不快と不安とを以て、人間の自由意志の働き得る範囲の狭さ（或ひは無さ）を思はない訳に行かない。俺達は、俺達の意志でない或る何か訳の分らぬもののために生れて来る。俺達は其の同じ不可知なもののために死んで行く。（「狼疾記」）

俺といふものは、俺を組み立てゝゐる物質的な要素（諸道具立）と、それをあやつるあるものとで出来上つてゐる器械人形のやうに考へられて仕方がない。（「かめれおん日記」）

もし「存在の不確かさ」が、単なる存在の必然性の無さだけを意味するのであれば、この文章は、それを一応解決していることになる。「何か訳の分からぬもの」（「あやつるあるもの」）によって、必然づけられていると言えるからだ。しかしこの文章は、決して解決しているようには読めない。その理由は明らかである。〈この私〉にとっては、この文章も「存在の不確かさ」を言っているに過ぎないからだ。つまり、「何か訳の分からぬもの」によって、完全に自己の生が支配されているという考えは、自己の生の根拠が〈この私〉の中には全くないことを意味するのである。

此の考へ方（自分は「原始的な蛮人」に生まれてくることも出来たはずだという考え方——引用者注）は、運命の不確かさに就いて、妙に三造を不安にした。（略）其の正体が解らない故に我々が恐怖の感情を以て偶然と呼んでゐるものが、ほんの一寸その動き方を変へさへしたなら、そのやうな事が自分に起こらなかつたと誰が言へよう。（「狼疾記」）

ここで、「運命」が、「偶然」と言われていることに注意しなければならない。〈この私〉から見れば、実は「運命」も「不確か」（＝偶然）であることに変わりはないのである。

繰り返して言えば、敦が「存在の不確かさ」という言葉で言い当てようとしたのは、存在の必然性がどこにもないという一般論

ではなく、どのように考えようとも、〈この私〉の中にはないという問題であった。自己の生の根拠が全くどこにもない（＝自己の生の出来事は全く〈偶然〉である）と考えても、「何か訳の分からぬもの」に完全に支配されている（＝自己の生の出来事は何かによって〈必然〉づけられている）と考えても、結局〈この私〉の中には自己の生の根拠が全くないことにかわりはない。生の出来事は、〈この私〉にとっては、全く予測不可能な、必然性を欠いたものとして現れてくる。敦が「存在の不確かさ」という言葉で言い当てようとしていた問題は、そのような〈この私〉の存在の無根拠性という絶望なのであった。[6]

三

さて、以上〈この私〉が生きることの根拠が〈この私〉の中には全くないという問題（「存在の不確かさ」という問題）を見てきたが、このような問題が、自己のありように対する強い自意識の問題と密接に結びついていることは、言うまでもない。なぜなら生きることの根拠を問題にする事自体、過剰な自意識ゆえだと言えるからである。敦も当然それを問題にしている。

実際、近頃の自分の生き方の、みじめさ、情なさ、うぢ〳〵と、内攻し、くすぶり、我と我が身を噛み、いぢけ果て、それで猶、うすつぺらな犬儒主義（シニシズム）だけは残してゐる。こんな筈ではなかつたのだが、一体、どうして、又、何時頃から、こんな風になつて了つたのだらう？　兎に角、気が付いた時には、既にこんなヘンなものになつて了つてゐたのだ。いゝ、悪い、ではない。強ひて云へば困るのである。ともかくも、自分は周囲の健康な人々と同じでない。勿論、矜持を以ていふのではない。その反対だ。不安と焦燥とを以ていふのである。ものの感じ方、心の向かひ方が、どうも違ふ。みんなは現実の中に生きてゐる。俺はさうぢやない。かへるの卵のやうに寒天の中にくるまつてゐる。現実と自分との間を、寒天質の視力を屈折させるものが隔ててゐる。直接そとのものに触れ感じることが出来ない。（「かめれおん日記」）

一読して分かるように、ここに描かれているのは、自己のありように対する強い意識（自意識）を抱え込んでしまい、それから逃れられない自分に苦しんでいる姿である。このようなところからも、〈自我探求者〉という敦のイメージが出てくるのであろうが、ここで私が言いたいのは、そのようなことではない。ここで確認しておきたいのは、後に「山月記」でクローズアップされてくるこの問題も、〈この私〉の生の無根拠性をめぐる一つの問題であるということである。このような自己に対し、例えば次のような解決の試みがされることからも、それは分かる。

畢竟、俺は俺の愚かさに殉ずる外に途は無いぢやないか。凡てが言はれ、考へられた後に結局、人は己が性情の指さす所に従ふのだ。その論議・思考と無関係に、である。（「狼疾記」）

このような言葉が、自己の行動の根拠を何とか自己の中に求め

ようとしているところから出ていることは明らかである。ここではそれは「性情」と言われている。ここでは生全体ではなく直接には行動について言われているが、このことがよく納得されれば、すなわち、自己の行動は、自己の「性情」をその根拠としているということを本当に納得できれば、この自意識の問題も、また違った方向に展開するだろうが、「狼疾記」はそうなってはいない。こう言ったところで、何の解決にもなっていないのである。「結局、人は己が性情の指さす所に従ふ」と言いながら、それに素直に従えないところに、『過去帳』における自意識の問題があるのである。敦固有のテーマとして強調されることの多かったこの問題も、〈この私〉の生の根拠が〈この私〉の中にないことと、複雑にからみあっているのである。(7)

四

以上『過去帳』を手がかりとして、〈この私〉の存在の無根拠性をめぐる二つの大きな問題を見てきた。一つは「存在の不確かさ」という、無根拠性の問題そのものであり、もう一つは自意識という、無根拠性の問題を抱えてしまうような自己のありようの問題であった。

ところで、ここで注意しなければならないのは、そのような問題が、これまで引用した文章からも明らかなように、『過去帳』の段階では、漠然とした恐怖＝絶望としてしか描かれていないという点だ。(8)例えば、「人は己が性情の指さす所に従ふ」というのも、そう叫んでいるだけであるし、「存在の不確かさ」の問題も、意識的に〈偶然〉〈必然〉の両方向にそれを突きつめていったわけではない。つまり『過去帳』二編は、主人公がそのような問題を抱え込む根拠が、物語自体の中になく、小説としてこのモチーフをうまく生かしきっているとはいえないのである。それに対して、『人虎伝』という物語を手に入れた敦が、自己のモチーフ（存在の無根拠性をめぐる二つの問題）をどのように展開したかを、次に見てみたい。

五

これまでたいてい「山月記」という小説を読み解くカギは、李徴が虎に変身した原因をどのように考えるかにあると考えられてきた。そのため、従来の「山月記」論のほとんどが、李徴が虎に変身した、三つの一見異なる原因のうちの、どれかに真の原因を求めており、三つのうちのどの原因を重視するかが、そのままそれぞれの立場を表しているのである。(9)しかしこのような見方が、〈この私〉という「山月記」を支える視線を全く考慮していないのは明らかである。なぜなら、その大部分を李徴の独白によっているということからも分かるように、「山月記」は、李徴の〈この私〉をなぞるように書かれているのであり、(10)「山月記」をいくら読んでも、李徴が、そのうちのどれかが本当の理由だと考えているようには決して読めないからである。つまり、そのことに注意して「山月記」を読むならば、どれが真の理由かではなく、なぜ一見矛盾する三つもの理由が、李徴によって語られているのかということのほうが、はるかに重要なのである。

また多くの論が、「山月記」の中に読みとることができる問題点が、すでに『過去帳』などの初期の作品にも見られることを指

摘して、中島敦固有のテーマを見ようとしてきた。[11] しかしそれらは、どこにそれが見られるかの指摘だけであって、どのように現れているかについては、ほとんど触れられてこなかった。「山月記」を読むとき重要なのは、どの箇所にどのような問題が現れているかではなく（もちろんそれも重要だがそれよりも）、「山月記」の中で、どのようにその問題が〈この私〉によって追いつめられていっているかである。[12]

このことを踏まえた上で本論では、先に見た存在の無根拠性をめぐる二つの問題が、どのように、展開されているかを見てみたい。

まず「存在の不確かさ」の問題を見てみよう。「山月記」では、李徴が虎に変身すること自体が、「存在の不確かさ」を表していると言えるが、それについて李徴（虎）は次のように語る。

> どうしても夢でないと悟らねばならなかつた時、自分は茫然とした。さうして倶れた。全く、どんな事でも起り得るのだと思うて、深く倶れた。しかし、何故こんな事になつたのだらう。分らぬ。全く何事も我々には判らぬ。理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ。

『過去帳』の主人公と違い、いくら現実離れしていようとも、李徴には自分の存在について考える動機が十分にある。自分が虎に変身したことが「どうしても夢でないと悟らねばならなかつた」という場所から、李徴は語っているからである。

さてこの部分は、虎に変身した第一の原因が語られている部分であるが、冒頭でも述べたように、ここには、ある意味で矛盾する考え（転調）が窺われるのにもかかわらず、従来「人間存在への深い懐疑」か「運命論」かのどちらかに読まれてきた。その理由は明らかである。つまりこの部分を、〈「判らぬ」のが「さだめだ」〉と言っていると読むと、〈判らぬ〉か〈さだめ〉かのどちらかに重点を置くしかない。しかしこの部分が、〈この私〉という視線から述べられていることを頭においてこれを読むと、この部分は、〈どうしても「判らぬ」（＝偶然）から「さだめ」（＝必然）に根拠を求めた〉と読めるのである。これは先に見た〈偶然〉〈必然〉の問題が、『過去帳』と比べて、より的確に表現されていると言える。李徴は「全く、どんな事でも起り得るのだ」という〈偶然〉を「深く倶れ」、「全く何事も我々には判らぬ」と述べる。〈偶然〉という絶望だ。そこでそれを克服するために、李徴は言う。「理由も分らずに押付けられたものを大人しく受取つて、理由も分らずに生きて行くのが、我々生きもののさだめだ」と。しかしこれは、すべてが「さだめ」によって必然づけられているという、〈必然〉という絶望を新たに生むだけである。この部分が『過去帳』の文章と全く違うのは、存在の無根拠性という問題をどのように追いつめて行っているかが、端的に表現されている点である。生の出来事は、〈偶然〉〈必然〉のどちらに突きつめようと、その根拠を〈この私〉に発見することはできない。李徴の語りは、どのように考えても、〈この私〉の生の根拠が〈この私〉の中にはないことを、的確に表現していると言えるのである。

ところで李徴が、この無根拠性に納得できていないことは、こ

の引用部分からだけでも十分に読者に伝わってくるけれども、李徴がその後、自分が虎に変身した理由を二つ（「性情」の問題と妻子の問題）語っていることで、はっきり分かる。つまり、李徴は存在の無根拠性という理由（全く無根拠に虎に変身した）を出しておきながら、その後、自分の中に変身の根拠を求めざるをえなかったのである。それは例えば、「性情」を持ち出す時の、「何故こんな運命になつたか判らぬと、先刻は言つたが、しかし、考へやうに依れば、思ひ当ることが全然ないでもない。」（傍点引用者）という言い方によく出ている。私の考えでは、李徴自身によって語られる、虎に変身した三つの異なる原因を考えるとき、ある意味で自己の存在の無根拠性を認めながら、それにもかかわらず、根拠を求めずにはおれないという順序になっている点こそ重要なのである。[13]

このように見てくると、「山月記」では『過去帳』と比べて、「存在の不確かさ」の問題が、より根源的に語られていることがわかる。『過去帳』ではバラバラに語られていたに過ぎなかったこの問題は、「山月記」において、〈偶然／必然〉を軸に両方向に突きつめられた上で、解決不可能であるにもかかわらず不可避な問題として現れているのである。

その意味で、「存在の不確かさ」という問題に関して言えば、『過去帳』から「山月記」への過程は、この問題を解決していったそれではなく、この問題をより自分にとって、そして読者にとって、切実（リアル）な問題として、徹底していくものであったと言える。[14]

六

では次にもう一つの、自己のありようという問題は「山月記」ではどのように現れているだろうか。「山月記」ではそれは、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」という「性情」の問題として語られている。

> 己は次第に世と離れ、人と遠ざかり、憤悶と慙恚とによつて益〻己の内なる臆病な自尊心を飼ひふとらせる結果になつた。人間は誰でも猛獣使であり、その猛獣に当るのが、各人の性情だといふ。己の場合、この尊大な羞恥心が猛獣だつた。虎だつたのだ。之が己を損ひ、妻子を苦しめ、友人を傷つけ、果ては、己の外形を斯くの如く、内心にふさはしいものに変へて了つたのだ。

この部分を素直に読むと、李徴は「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」を持っており、それが「性情」と呼ばれていることが分かる。そしてこの「臆病な自尊心」と「尊大な羞恥心」とは、李徴の同じ一つの心のありようを指す言葉であると読まざるをえないから、[15]結局、「性情」＝「尊大な羞恥心」＝「臆病な自尊心」と呼ばれる自己のありようが李徴にとって、重要であったということになる。

『過去帳』において「性情」の問題とは、「結局各人は、各様に其の素質を展開するより外に手はない」と分かっていながらも、それを常に自意識が邪魔をするという自己のありようの問題であ

ったことから考えて、次の引用からもよりよく分かるが、問題そのものは「山月記」においても同じであると言える。しかし「山月記」の方は、それを「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」というより具体的な問題にしている。この「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」をもう少し詳しく見てみよう。

人間であつた時、己は努めて人との交を避けた。人々は己を倨傲だ、尊大だといつた。実は、それが殆ど羞恥心に近いものであることを、人々は知らなかつた。勿論、曽ての郷党の鬼才といはれた自分に、自尊心が無かつたとは云はない。しかしそれは臆病な自尊心とでもいふべきものであつた。己(おれ)は詩によつて名を成さうと思ひながら、進んで師に就いたり、求めて詩友と交つて切磋琢磨に努めたりすることをしなかつた。かといつて、又己は俗物の間に伍することも潔しとしなかつた。共に、我が臆病な自尊心と、尊大な羞恥心との所為である。己(おのれ)の珠に非ざることを惧れるが故に、敢て刻苦して磨かうともせず、又、己(おのれ)の珠なるべきを半ば信ずるが故に、碌々として瓦に伍することも出来なかつた。

ここで注意しなければならないのは、これが李徴自身が語っているということと、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が、他者の視線を強く意識した言葉であるということだ。

先に引用した「かめれおん日記」に、「かへるの卵のやうに寒天の中にくるまつてゐ」て、「直接そとのものに触れ感じることが出来ない」自己のありようが語られていたが、「山月記」同様、『古譚』の一つである「文字禍」にも、次のようにある。

埃及人は、ある物の影を、其の物の魂の一部と見做してゐるやうだが、文字は、その影のやうなものではないのか。

獅子といふ字は、本物(ほんもの)の獅子の影ではないのか。それで、獅子といふ字を覚えた猟師は、本物の獅子の代りに獅子の影を狙ひ、女といふ字を覚えた男は、本物(ほんもの)の女の代りに女の影を抱くやうになるのではないか。文字の無かつた昔、ピル・ナビシュチムの洪水以前には、歓びも智慧もみんな直接に人間の中にはひつて来た。今は、文字の薄被(ヴェイル)をかぶつた歓びの影と智慧の影としか、我々は知らない。

「寒天質」や「文字の薄被(ヴェイル)」という言葉で敦が語っているのは、自分がほんものに直接触れられないという感覚である。「文字禍」ではそれが言葉の問題として扱われていて興味深いが、ここで確認したいのは、自己のありようという問題では、他人や現実とどのように関係を結ぶかということが重要であり、「山月記」ではそれが、他人がほんとうの自分に触れられないという形で表されていることだ。つまり、李徴には、本当の自分を他人は理解してくれないという思い込みがあるのである。このような李徴の確信は、虎に変身してからいっそう強くなる。

己は昨夕も、彼処で月に向かつて咆えた。誰かに此の苦しみが分つて貰へないかと。しかし、獣どもは己の声を聞いて、唯、懼れ、ひれ伏すばかり。山も樹も月も露も、一匹の虎が

怒り狂つて、哮(たけ)つてゐるとしか考へない。天に躍り地に伏して嘆いても、誰一人己の気持を分かつて呉れる者はない。丁度、人間だつた頃、己の傷つき易い内心を誰も理解して呉れなかつたやうに。己の毛皮の濡れたのは、夜露のためばかりではない。

ここでも、虎の姿のため、ほんとうの自分が分かってもらえない悲しみが語られている。虎とは、他でもない「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」である。[16]結局、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」＝「性情」の問題とは、具体的には次のような問題であった。

李徴は、自分で思っている本当の自己と、他人がそう思っているであろう自己とが、乖離している、あるいは乖離することを恐れていた。そのことが自己を他者と向き合わないような自己にしたのだ。李徴は、そのような自己のありようを「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」＝「性情」という言葉で言い当てようとしたのである。ここにあるのは、他者が自己を見る視線に対する意識（自意識）であるが、「山月記」において決定的に重要なのは、李徴はそれを捨て去ることがもはや不可能であることをはっきりと意識していたということだ。だから李徴は「狼疾記」の三造のように、「人は己が性情の指さす所に従ふのだ」と簡単には言わず、[17]次のように語る。

己の中の人間の心がすつかり消えて了へば、恐らく、その方が、己はしあはせになれるだろう。だのに、己の中の人間は、その事を、この上なく恐ろしく感じてゐるのだ。ああ、全く、どんなに、恐しく、哀しく、切なく思つてゐるだらう！己が人間だつた記憶のなくなることを。

なぜ「しあはせ」なのか。完全な虎には「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」が無いからである。虎は、他者の視線も自己のありようも意識しない。[18]ではなぜ「恐ろしく感じてゐるの」か。そのような虎には、〈この私〉が生きているという実感（意味）が全くないからである。李徴は〈この私〉という確信を、「人間だつた記憶」と呼んでいるが、[19]李徴にとっては、〈この私〉であることと、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を抱えることは、同じことを意味する。だから、〈この私〉がなくなることは、「しあはせ」であると同時に、「恐しく、哀しく、切な」いことであった。李徴にとって、本当に問題だったのは、虎に変身してしまう（人間でなくなる）ことではなく、虎に変心してしまう（〈この私〉がなくなる）ことなのであった。

七

以上「存在の不確かさ」と「性情」（自己のありよう）の二つの問題を中心に、それらが「山月記」において、どのように現れているかを見てきた。前者は虎に変身するという物語を得て、〈偶然〉〈必然〉のどちらに突きつめようと、自己の存在の根拠を〈この私〉に発見することはできないという問題が、『過去帳』に比べ、より徹底した形で、より根源的に語られていた。後者の「性情」も、常に他者の自分に対する視線を意識せざるを得ない自己のありようとして、〈この私〉を手放さない限り「臆病な自

尊心と、尊大な羞恥心」から解放されず、そこから解放されることは同時に〈この私〉を喪失することであるという、どうしようもない背理として、より深く描かれていた。

そして「山月記」において、李徴の独白（モノローグ）が進むにつれて、この両者の関係が明らかになってくる。つまり李徴は、まず〈この私〉の生の根拠が〈この私〉の中に全くないと言いながら、それにもかかわらず、〈この私〉の中に根拠を求めざるをえなかった。ところがその結果なんとか発見した根拠はと言えば、虎（猛獣）とも言うべき「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」であった。そしてそれは、〈この私〉という視線を手放さない限り、どうしようもないものであった。私が順序にこだわったのは、〈この私〉の視線を強く握って手放さないことの背理が、「山月記」ではこのような道筋を通ることによって、リアルに表現されていることを言いたかったからである。

結局「山月記」は、一言で言えば、『過去帳』での漠然とした焦り、恐怖、絶望と比べて、この二つの問題を手がかりに、〈この私〉の存在の無根拠性の問題を、ぎりぎりまで突きつめた後に出てきた、はっきりとした絶望＝恐怖が語られている作品であると言える。先にも書いたが、その意味で、『過去帳』から「山月記」への過程は、この問題を解決していったそれではなく、この問題をより自分にとって、そして読者にとって、切実（リアル）な問題として、徹底していくものであったと言えるのである。

ところで敦の文学は、「山月記」以降どういう方向に進んだのか。つまり、〈この私〉の存在の無根拠性の問題を「山月記」まで徹底してきた後、敦の文学はどこをめざすことになるのだろうか。それを詳述するのは、本論の範囲を越えているので、ここでは私なりの見通しだけ簡単に述べたい。

「山月記」において、敦が到達したのは、〈この私〉が生きる根拠は〈この私〉にはないにもかかわらず、それを求めずにはおれないこと、つまり〈この私〉であり続けることが、どんな困難をまとっていようとも、それを願わざるをえないという場所であった。言い換えるなら、自分が生きることの根拠が〈この私〉にはないことが分かった時、今自分が生きていることそのこと自体を根拠に生きるしかないというような場所である。李徴にとっては、「臆病な自尊心と、尊大な羞恥心」を持つことそれ自体が、〈この私〉が〈この私〉として生きている根拠なのである。私の考えでは、敦は「山月記」以降、それをうまく納得するという問題をより積極的に扱うようになる。例えば、「悟浄嘆異（ママ）」には次のようにある。

> 凡そ対蹠的な此の二人（悟空と三蔵法師――引用者注）の間に、しかし、たつた一つ共通点があることに、俺は気が付いた。それは、二人が其の生き方に於て、共に、所与を必然と考へ、必然を完全と感じてゐることだ。更には、その必然を自由と見做してゐることだ。
>
> 自由な行為とは、どうしてもそれをせずにはゐられないものが内に熟して来て、自づと外に現れる行為の謂だ。

このような「自由な行為」は、存在の無根拠性の問題を無効に

する。なぜなら、生の出来事の一つ一つを必然＝自由と見なしうるような生とは、今生きていることそれ自体を根拠とするような生だからである。そのような場面でのみ、生の出来事が、〈この私〉のなかに根拠を持つ必然的なものとして、肯定できるのではないだろうか。[21] しかし敦は、そのような生を十分に、小説に書くことなく夭折した。

敦の文学の出発は、自分は死ぬにもかかわらず、生きたいと願うことの意味を問うことであった。果たして敦は、その意味をうまく了解できたであろうか。本論で言えるのは、「山月記」においてはじめて、それをきっちり問うことのできる場所を描けたということだけである。

今まさしく自分が死ぬだろうという場面で、敦は次のように言っている。

好きな本も、芝居も、見ることが出来なくなり、書くことも出来なくなると、

「書きたい、書きたい。」

と涙をためて申しました。

「もう一冊書いて、筆一本持って、旅に出て、参考書も何も無しで、書きたい。」

「俺の頭の中のものを、みんな吐き出してしまひたい。」

とも申しました。

（中島タカ氏「お礼にかえて」ツシタラ第四輯　昭和四九年）

おわりに

本論は「山月記」の位置と題したが、本論で私が意図したのは、従来とは全く違う、新しい位置に「山月記」を置くことではなかった。そうではなくて、従来ほとんど問題にされなかった、敦文学における〈この私〉という視線に注意して読むと、敦文学の中に「山月記」が、どのような根拠で、いかに位置づけられるのかという、その過程を書きたかったのである。成功しているかどうかは分からないが、この試みは、「山月記」をどう読むかという問題であり、敦の文学全体をどのように読むかという問題への第一歩なのである。

注

(1)本論では便宜上次のように表記する。
『過去帳』＝「かめれおん日記」「狼疾記」
『古譚』＝「孤憤」「木乃伊」「山月記」「文字禍」

(2)木村一信氏「『山月記』論」（「日本文学」昭和五十年四月）など。

(3)奥野政元氏「『古譚』の世界」（『中島敦論考』昭和六十年　桜楓社所収）など。

(4)(3)に同じ。

(5)敦が死の問題を扱ったのには、それなりの必然性がある。一つは、喘息であり、もう一つは、多くの身近な人間の死であった。つまり敦は〈自分の死〉と〈他人の死〉に囲まれて、小説家として出発したのである。

(6)本論では詳しく触れられないが、この存在の無根拠性という問題は、敦文学にとって非常に重要である。例えば、『名人伝』の修行後の紀

昌は何を根拠に弓の（？）名人と言えるのか。またこの問題は「山月記」を含む『古譚』を貫くテーマでもある。例えば「孤憤」には次のような問題がある。憑き物に憑かれることは、主体性（〈この私〉の根拠）を失うことである。しかもその時、文学の（人を楽しませる）表現が可能だとしたら、一体どうなるか。その時〈私は文学者（詩人）である〉とは、一体どういうことを意味するのか。

(7)複雑にというのは、単純な因果関係で説明できないという意味である。

(8)鷺只雄氏に「この時点では、お先まっくらで皆目見当がつかない状態にある」（「中島敦と短歌――享楽主義の終焉」「都留文科大学研究紀要」昭和四七年八月）という指摘がある。ただしつけ加えるなら、私の考えでは、「己が性情の指さす所に従ふ」という見当はついているが、それは具体的にどういうことなのかが、皆目分からないということになる。

(9)(2)に同じ。

(10)したがって李徴の独白と地の文（？）との記述が矛盾する場合もあるのである。

(11)(2)に同じ。また鷺只雄氏は敦が「自我追求者」と一般にイメージされた原因を「『狼疾記』と『かめれおん日記』をいわば本文に、それ以後の作品をインデックスとして理解把握するという方法」を「踏襲している」ためであると述べている（「初期中島敦論――「虎狩」を中心に――」『言語と文芸』昭和四八年五月）。

(12)勝又浩氏は「『山月記』では、こうした話のはこび、論理の展開に注意しなければならない」（『spirit 中島敦』有精堂　昭和五九年）。しかしそのように言う氏も、変身の第一の原因を「運命論」としている。

(13)この順序が「山月記」における問題の突き詰めの道筋であり、第一の原因の独白にはそれが端的に出ている。

(14)山下真史氏は、「『かめれおん日記』は『無題』や『山月記』よりもさらに徹底した絶望感が語られている作品ということになるだろう」（「中島敦『かめれおん日記』論」「国語と国文学」平成二年二月）と述べておられるが、以上のような理由から私の考えは全く反対である。

(15)黒川友治氏「『山月記』のレトリック――臆病な自尊心と尊大な羞恥心――」（「解釈」昭和六二年六月）参照。

(16)変身するのが虎というところに敦の「甘さ」を見、むしろ「ゲジゲジ」にしたほうがよいとする古屋健三氏の指摘があるが（「中島敦――肉体の喪失」『ユリイカ』昭和五二年九月）、それでは他者の視線と自意識との問題が表現できず、「山月記」の虎の意味が、全く説明できない。

(17)三造の言葉は、「性情」を捨て去ることが本当に不可能だと分かったところから出てはいない。

(18)李徴が虎に変身する場面には「覚えず」「無我夢中で」「何時か」「知らぬ間に」「気が付くと」といった、〈我知らず〉という意味の語が多く出てくる。

(19)「記憶」以外には、虎と李徴が同一人物（？）であるという保証はどこにもない。ただそれぞれの内面が記憶の糸で結ばれていることだけが、「如何にも自分は隴西の李徴である」と言える、虎にとっての根拠である。この記憶の問題や魂の問題は存在の無根拠性の問題として見る時、敦にとって重要な問題である。例えば「木乃伊」で、パリスカスが何を根拠にミイラが自分であると確信しているのかという問題や、「悟浄出世」の冒頭などにもこの問題が見られる。

(20)執筆時期の問題もあるが、ここではテーマという点から見て、「悟浄歎異」も「『山月記』以降」とした。

(21)時代もジャンルも全く違うが、松尾芭蕉の『笈の小文』『栖居の弁』『歌仙の賛』などに見られる、〈やむにやまれぬ心の働き〉が、この具体的イメージを考える時、参考になる。

※本文の引用は中島敦全集（筑摩書房）によった。ただし、漢字は新字に改めた。